

Daniel Garber, *Leibniz: Body, Substance, Monad* (Oxford University Press, 2009, xxi+428p.)

枝村祥平

本書は、北米を代表する17世紀哲学史家の一人であり、特にデカルト及びライプニッツ (1646-1716) の研究で世界的に知られる著者が、長年にわたるライプニッツの物体の形而上学に関する発展史的考察をまとめたものである。なおガーバーは現在プリンストン大学哲学部の教授である。本書は序論と九つの章からなり、ライプニッツに於ける機械論とその刷新 (第一～四章)、因果論 (第五・六章)、現象主義 (第七章) 及び1700年以降の物体の形而上学を扱う (第七～九章)。本書の特に重要な点をみていこう。

(1) ガーバーはライプニッツの中期 (Middle Years: 1686-1700年頃) と後期 (それ以後) との比較研究をリードしてきた研究者で、本書はその総決算ともいえる。ガーバーは1980年代よりライプニッツ研究に携わってきた (Garber, 1982, 1985)。1985年の論文でガーバーは、アルノー宛書簡

(1686-90年) での物体的実体の考察、ファルデラからの書簡についての覚書 (1690年) での魂は実体ではなく実体的形相であるとの主張に基づいて (A VI iv, 1670)、中期では実体的形相と身体とをもつ物体的実体ない

し有機体こそが個体的実体で、延長した身体を欠く非物質的な単純実体ないしモナドのみが実体だという後期の議論とは異なるとした。これに対しアダムズは、ライプニッツは中期から一貫して単純実体のみを実体とみなしており、身体をもった有機体は中期でも厳密な意味では実体であるとは考えられていない、とした (Adams, 1994)。そしてアダムズは、魂という語はときに非物質的実体ないしモナドではなく、モナドの能動的側面 (原始的能動的力) を指し示すことがあるとし、ファルデラからの書簡についての覚書での魂は実体ではないとの主張も、モナド全体が実体だとの主張と矛盾しないとした (Adams, 1994, p. 275)。ガーバーは一旦アダムズへの歩み寄りをみせたが (Garber, 2004; Lodge, 2005)、本書で改めてアダムズの解釈に対して自説の擁護をしている。後に詳述するようにアダムズは、ライプニッツが物体のもつ抵抗や不可入性は非物質的実体であるモナドがもつ原始的受動的力から派生した力と考えたと解釈した (Adams, 1994, p. 328; pp. 393-4)。そしてアダムズは『想像的現象から実在的現象を区別する仕方について』 (1683-6年) を根拠に、中期でも同様の見解をもたれていたとした (Adams, 1994, p. 328; p. 338)。これに対しガーバーは第四章で、中期に物体の抵抗や不可入性の基礎とされた第一質料は、必ずしも非物質的実体ないしモナドの原始的受動的力と同一でないとした (pp. 168-9)。このように本書は、中期と後期の議論は異なると

いうガーバーの以前からの主張に、これまでの論文にはなかった新しい擁護を加えている。

一方ガーバーと同じく中期と後期との差異に着目した著名な学者もいるが、特に第八章には彼らの研究にはない成果が示されている。キャサリン・ウィルソンは、『形而上学叙説』（1686年）に三つの異質な形而上学が混在しているとした(Wilson, 1989, pp. 88-110)。『形而上学叙説』では、主語となるが述語にならない個体的実体の形而上学、形相と質料をもち身体を伴う有機体を実体とする物的実体の形而上学、そして表象された物体は魂の内なる現象にすぎないという現象主義の形而上学がすべて見出されるというのである。ウィルソンは『形而上学叙説』が書かれた後に有機体ないし物的実体がモナドないし単純実体から構成されたものとして説明されるいきさつをも論じている(Wilson, 1989, pp. 180-96)。しかし、ウィルソンは具体的にどの年に初めてモナドの概念が結実したのかを示していない。対して本書では、テキスト上の根拠が紹介された上で、ライプニッツがモナドの形而上学を保持するのに至ったのは結局、1700年あたりであるとの解釈が示されている(pp. 335-49)。これは発展史的考察という観点からは一歩進んだものといえる。

またフランスではミシェル・フィションが、『形而上学叙説』から『モナドロジー』に及ぶ重要なテキストの解説で、中期と後期の形而上学の相違と発展の経緯を論じて

いる(Fichant, 2004)。そして1695年にモナドの語が使用され始めたことに着目し、これ以後では『形而上学叙説』のそれとは異なる形而上学が提示されていたとする(GM2 295)。しかし私の考えるところでは、ガーバーが指摘するように1695-99年ではモナドの語で意味されているものが、必ずしも非物質的な単純実体ではなく(pp. 337-8; GM3 537; G4 551)、この点を鑑みるとガーバーが本書で示した解釈が発展史的理解としてより適切であるように思われる。

(2) ガーバーは第三～四章で力概念、特に受動的力に関する優れた考察をしている。『力学提要 (Specimen Dynamicum) 』（1695年）では、原始的能動的力・原始的受動的力・派生的能動的力・派生的受動的力という四つの概念が論じられる(pp. 133-40; GM6 236-7)。原始的能動的力は物的実体に内在する能動的力で、エンテレケイアや実体的形相とも同一視され、 mv^2 を測度とする活力はこの力から派生した能動的力だとされる。一方原始的受動的力はスコラで第一質料と呼ばれていたもので、抵抗や不可入性という派生的受動的力をもたらすものとされる。さらにこれら四つの力が延長をもった物的実体だけでなく非物質的実体であるモナドにも帰されているので、力概念の解釈は極めて困難であるが、ガーバーはこれについて秀逸な分析を加えている。ガーバーの最も重要な主張の一つとしては、物理学的な文脈で語られる派生的受動的力（抵抗など）を、非物質的実体

であるモノダがもつ原始的受動的力に基づいて説明することの困難をライプニッツ自身が意識していた、というものが挙げられる。

表象と欲求のみをもつモノダを基軸とする存在論によれば、派生的受動的力とは明晰でなく混雑した表象をもたらすある時点での傾向だと考えられる(cf. G2 262)。一方で物体がもつ派生的受動的力とは抵抗や不可入性であるとされる。このようにモノダと物体がもつ派生的受動的力は異質にみえる。もっとも、これら派生的受動的力はそれが基づくところの原始的受動的力を要請するとされる。アダムズによれば、ライプニッツは抵抗や不可入性などは他の物体からの作用を前提として働くもので相対的で関係的なものに過ぎず、実体に内在する性質ではないと考えた(Adams, 1994, p. 328)。そしてこうした物理学的なレベルの受動的力をもたらすものは、非物質的実体のもつ原始的受動的力に他ならないとライプニッツは考えた、というのである。対してガーバーによれば、ライプニッツは物体的実体のもつ原始的受動的力ないし第一質料が物体的実体の抵抗や不可入性をもたらすとしたが、それが表象の不完全性をもたらすとは論じていない。これを根拠にガーバーは、物体的実体を基軸とした存在論をモノダのみが存在するという理論に還元することには反対する(pp. 168-70)。そしてガーバーの解釈によれば、ライプニッツはデ・ボス宛書簡で仮にモノダのみが存在するのであれ

ば原始的受動的力は表象の不完全性をもたらすものでしかなくなると認め、それは物体的実体のもつ受動的力とは異質であることを認めざるを得なかったのである。

(3) 第三～四章の受動的力の分析を受けて第九章では、ライプニッツ解釈上の難問とされてきた実体的紐帯(vinculum substantiale)に関する議論がうまく読み解かれている。実体的紐帯は1712年のデ・ボス宛書簡で初めて紹介されるが(G2 435)、ガーバーによれば、ライプニッツが四年にわたり実体的紐帯を書簡で論じた主たる動機は物体の受動的力の説明であった。デ・ボス宛書簡でライプニッツは、多くのモノダが実体的紐帯により結合され一つの物体的実体を形成する可能性を示唆する。物体的実体は一つの支配的モノダ(動物の魂など)とその有機的身体を構成する多くの従属的モノダを含んでいるが、それらは実体的紐帯により統合され一つの不可分の実体となるというのである。そして実体的紐帯が存在すると考えれば、延長した物体が物体的実体となり、連続的延長をもった物体全体に抵抗などの受動的力が行き渡っていることも説明できるとされる(G2 460-1, 520)。

バートランド・ラッセルやドナルド・ラザフォードは、実体的紐帯の議論をカトリックであるデ・ボスへの妥協と考えた(Russell, 1934, p. 154; Rutherford, 1995, pp. 276-81)。実体的紐帯は、物体の実体的な変化を、そしてカトリックの化体の秘蹟を説

明するためのものだった、というのである。ガーバーはこの解釈を、次の三点を挙げて批判する(pp. 380-1)。第一に、実体的紐帯に関する議論はデ・ボス宛書簡以外でも見受けられ、その議論は神学的文脈でなされているわけではない。第二に、デ・ボスはモナドのみが存在するという立場によっても化体は説明されうると考えるに至り、実体的紐帯にそれほど関心を示さなくなったが、そのときでさえライプニッツは自ら率先して実体的紐帯を論じていた。第三に、化体はデ・ボス宛書簡における唯一のトピックではなく、四年にわたる実体的紐帯に関するやりとりをすべて化体の文脈で理解するのは無理がある。これらは確かに、従来の解釈を退ける有力な議論だといえるだろう。とはいえガーバーは、ライプニッツ自身が最晩年にこの実体的紐帯を全面的に受け入れモナドのみを实体とする形而上学を刷新したわけではなく、むしろ模索途中で死を迎えたと推察している(pp. 387-8)。

最後に若干の批評を入れて書評を閉じる。欲を言えば、初期における実体概念の変遷がもう少し欲しかったところである。

「実体」の語は本書の表題にも入っているだけに、1660年代から70年代にかけて、実体という語が様々な異なった文脈で使用されている様を整理した方が良かったのではないか。またテキストが豊富に紹介された結果、それらを十分に整理する紙面がなくなり、アダムズの研究書に見られるような明瞭な論理展開を少し欠いた印象もある。

略号

- A = *Sämtliche Schriften und Briefe*. Herausgegeben von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Darmstadt, 1923 ff., Leipzig, 1938 ff., Berlin, 1950 ff. Cited by series, volume, and page.
- G = *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*. Ed. C. I. Gerhardt. Berlin: Weidmann, 1875-1890. Reprint, Hildesheim: Georg Olms, 1978. Cited by volume and page.
- GM = *Leibnizens Mathematische Schriften*. Ed. C. I. Gerhardt. Berlin: A. Asher, and Halle: H.W.Schmidt, 1849-1863. Cited by volume and page.

文献

- Adams, A. (1994). *Leibniz: Determinist, Theist, Idealist*, New York: Oxford University Press.
- Fichant, M. (2004). 'Introduction: L'invention Métaphysique', In Fichant ed. *Discours de métaphysique suivi de Monadologie* (pp. 7-140), Gallimard.
- Garber, D. (1982). 'Motion and Metaphysics in the Young Leibniz', in M. Hooker (Ed.), *Leibniz: Critical and Interpretive Essays* (pp. 160-84), Minneapolis: University of Minnesota Press.
- (1985). 'Leibniz and the Foundations of Physics: the Middle Years', in K. Okruhlik & J. Brown (Eds.), *The Natural Philosophy of Leibniz* (pp. 27-130), Dordrecht: Reidel.
- (2004). 'Leibniz and Fardella: Body, Substance, and Idealism', in P. Lodge (Ed.), *Leibniz and His Correspondents* (pp. 123-40), Cambridge: Cambridge University Press.
- Lodge, P. (2005). 'Garber's Interpretation of Leibniz on Corporeal Substance in the 'Middle Years'', *Leibniz Review*, 15, 1-26.
- Russell, B. (1937). *A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz*, (2nd Edition) London: George Allen and Unwin.
- Rutherford, D. (1995). *Leibniz and the Rational Order of Nature*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wilson, C. (1989). *Leibniz's Metaphysics*, Princeton: Princeton University Press.